小野 友道

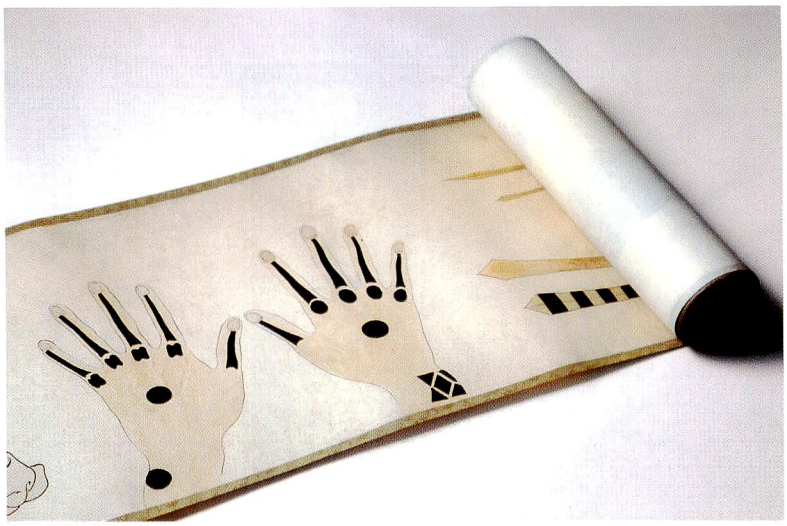
南嶋の女のいれずみ —針突—

熊本大学附属図書館に、未だ公開されず秘かに眠っている巻物がある。「沖縄風俗絵巻」がそれである。紙本（巻子）で、縦幅30cm、長さ20m17cmある。作者や制作年月日は不明であるが、「五高」の角朱印が押されているので、それが熊本大学の前身第五高等学校時代の収蔵品であることを示している。1988年、琉球大学から熊本大学に出向いた橋本健一課長（当時）によってその存在が明らかにされた。この絵巻物については琉球大学池宮正治教授が、絵のモチーフなどから明治初年から半ばにかけて制作されたもので、その描写に誤りがないことなどから沖縄の人の手によるものであろうと推測している。画面は52に区分され、いろいろな階級の装束、さまざまな商売、行事などが色鮮やかに描かれている。

風俗絵巻とあるからには針突のことも少しは描かれているのではと思い、図書館を訪ねた。その絵巻は首里城からはじまり、簪類の絵のあと、いきなり大きな両手が目に飛び込んできた。その手にはまさしくいれずみがあった。それは例えば、小原一夫の『南嶋入墨考』や、市川重治の『南島針突紀行』に載っている文様と全く同じであった。いきなりの遭遇に私は鳥肌が立った。明治26年、およそ半年をかけて沖縄の島々を歩いた笹森儀助が、強い興味を示したその針突である。彼もその風俗に大いに驚いて、「婦女皆、手ニ黥ス。女ノ元服ト云ヘリ」と記した。この絵巻はちょうどその頃の風俗を描いている。

巻物を捲っていくと、「王子婦人」「平民男女」「按司夫婦」「士族男女」「田舎婦人 楊梅売」と題して描かれた女性たちの手に、いずれも針突があった。「八重山婦人」の手にあるものは円や四角ではなく、Xや＊などの文様が特徴的で、ひとり異なった印象を受けた。また「巫女」の手に針突が無いのが私には不思議な気がした。新婦は残念ながら、白い布をすっぽりかぶった姿で、その手に針突があるか否かわからなかった。もう一度巻き返してみたが、素人目にもこれは大切なものだという実感がわくと同時に、私は初めて沖縄に行った時のことを思い出していた。

昭和45年私は復帰を控えた沖縄に総理府からの派遣で学童検診の一員として参加する機会を得た。九州各大学からの小児科などの先生方と一緒に、私は皮膚科健診を担当した。初めての公用旅券での外国旅行であった。石垣島のホテルに拠点を置いて、竹富・西表・与那国まで出かけた。初めて経験することも少なくなかった。当時の屋良朝苗行政主席（昭和47年、復帰後初代知事）にお会いしたり、また基地のすごさも金網越しに見た。その時シーバス・リーガルという高級ウイスキーの名と味も覚えた。八重山の

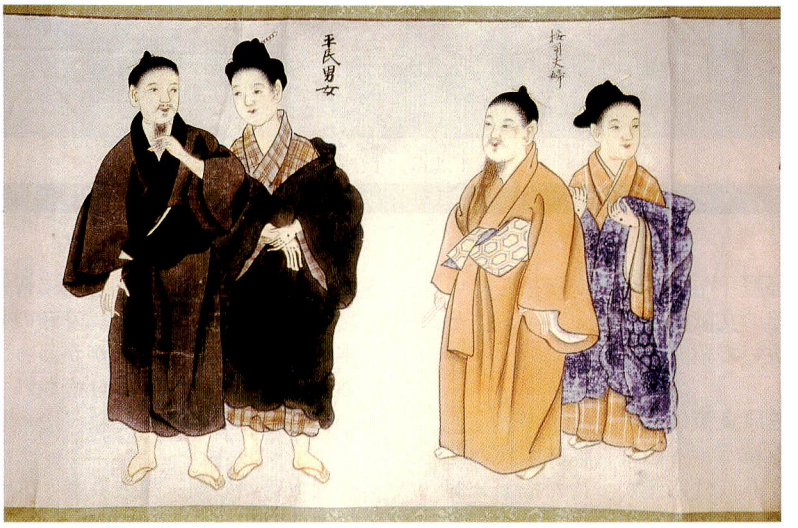


『沖縄風俗絵巻』「針突」（熊本大学附属図書館所蔵）

人たちの言葉がきれいな標準語であったことにも驚いた。ほとんどの子どもが目をくりっとさせ元気そのものであった。そんなある日、一人の優しい大いに年を重ねたおばーちゃんの、その手の甲のいれずみがちらっと目に入った。その頃の私はいれずみはやくざというイメージしか持っていなかったので、いささか驚き、すこし不安になった。もしや、やくざの女だった？それにしてはどの男の手の甲にもいれずみらしきものは見当たらなかった。しかし、このことには決して触れまいぞ、尋ねまいぞと思った。それが「針突」で、沖縄女性の風習であると知ったのはずいぶん後のことだった。

昔、沖縄・奄美大島など西南諸島の女性はこぞって手の甲にいれずみをした。浄土宗の碩学、袋中が、『琉球神道記』に、「（前略）又女人の針衝（女人ハ掌ノ後ニ針ニテシゲクツキテ墨ヲサスナリ）何事ゾヤ。……」とあり、小原は「これは琉球語<ハヅキ>の語源について述べた最初のものである」と記している。このいれずみを沖縄や奄美では「ハジチ」「ハヅキ」などという。すなわち「針突」である。大人になった証、通過儀礼としてのいれずみであった。幕末の頃、奄美ではいれずみの代価として米三升が相場で、それでいれずみすることを「三升突き」ともいった。明治30年代まで行われていたらしい。奄美では廃藩置県に伴って、それ以外の沖縄・宮古、そして八重山は明治12年に沖縄県となった。明治政府はその発足に伴っていれずみ禁止令を出したが、沖縄のみはその事情を考慮して明治32年になって禁止令を発令した。しかしながら、風俗としていろいろな意義を有するハヅキを隠れて入れた女性は少なくなかった。それでも次第にこの風習は消え去り、現在これを見ることはまずないが、まれに、最近まで高齢者の手に鮮やかに残っていた。ハンセン病療養所宮古南静園の菊池一郎園長が平成7年赴任した際、当時95歳の老女の手に典型的なハヅキを見て感激した。ハヅキは女性の誇り、あこがれであり、その老女もそれを自慢の種にしていたという。宮古島でハヅキは、昭和の初めに行われたのが最後らしい。いずれにせよ、年齢的な要因からも、現在もうハヅキを見ることはまずない。奄美などの民謡に「トジ欲しゃもちゅとき　夫欲しゃもちゅとき　あやハディキふしゃや命かぎり」（妻ほしさも一時、夫ほしさも一時、入れ墨欲しさは私の命かぎり）と詠われている。男にもそれは魅力で「腕あげりゃあげり　あやハディキ拝も胸あきりあきり　玉乳拝も」（腕をあげてきれいに彫られた貴女の入れ墨を拝ましてくれ、胸をあけてたまのようなにきれいな貴女の玉乳を拝ましてくれ）と島唄にある。それにしても、なぜ南嶋の女性はいれずみにかくもこだわってきたのであろうか。若いきれいな皮膚に青が映えて、男をそそるだけではあるまい。

なぜ南嶋にこの習俗が始まったかについて、西暦14世紀の中葉、中山王察度の時に、中山再興の神宮聞得大君が久高島参詣の途中暴風に遭って日本に漂流した話に伴った伝承がある。



『沖縄風俗絵巻』「平民男女、按司夫婦」女性の手に針突がある。（熊本大学附属図書館所蔵）

聞得大君の行方不明後、凶年が続いたので、捜索に出かけ紀伊の国にいた彼女を連れ戻したが、なぜか御殿に入るのを拒んだ。その理由の一つとして伝承では、紀伊の国の片田舎の村長の妻になっていたので、再び聞得大君御殿に入るのを遠慮したという。さらに村長の厄介になって、とうとう結婚を申し込まれたので、不承々々に結婚することになったのを、一人の侍女の機知で、手の甲に黥をして三三九度の杯を行ったが、男が杯を差し出した時、女君が例の手を差し出すと、男はびっくりして杯を落としたので、不吉だといって、式がおじゃんになったという話もある。そういう訳で手の甲にいれずみをしていると、大和に連れて行かれないということにもなった。

その他にもいろいろな話が伝わっている。市川は沖縄全体に共通する理由として、死後、先祖に会ったとき、そのいれずみが子孫であることの証明だとするというのである。若い娘が死んで、未だ針突をしていなかった場合には、納棺に際してその娘の手に針突の文様を筆で描き加えてやったという。「あやはづきや　欲しや命まぎり、それが後生迄の形見」と詠われている。小原はいれずみを詠った多くの歌謡から、1）入れ墨に永世の観念があったこと、2）島によって特定の入れ墨施術者がいたこと、3）結婚と不可分の関係があったこと、4）手の甲の入れ墨は水草の花の色を思わせる美しい青い色を帯びていることを指摘している。

女の自慢であった針突も、針突禁止令以後、風俗改良の名のもとそれが軽蔑される風潮が生まれ、大正5年に象徴的な事件が発生した。フィリピンに針突を入れた女性が移民してきたことに憤慨した現地の沖縄の人たちが、対応策を話し合うために県人会を設立した。「比律賓の富源は今後いくらも沖縄青年の出稼ぎを歓迎するのだから、彼等三名の入墨女の為に本県人に恥をかかせるのに忍びないと、気の毒ながら彼等を送還することになったとの事である」と琉球新報（1916,7,22日付）が報じた。また、明治の頃の話として、奄美出身で東京の官界で出世した人が、母親を東京へ呼び寄せたが、手のいれずみを気にして人前に出るのをはばかり、夏でも手袋を用いていたが、再び島に戻ってしまったという。紡績女工として本土に働きに来た人の中には、手に硫酸をかけて針突を消した者もいるという。針突が禁止されて100年を超えた今、若い人たちがファッション感覚でいれずみするのを、彼女たちは天国でどう見ているのだろうか。

（熊本大学　理事・副学長）

主要文献

1）池宮正治：「沖縄風俗絵巻」について ―熊本大学附属図書館所蔵―、琉球大学附属図書館報、22, 3～8, 1989.
2）市川重治：『南島針突紀行』、那覇出版社、1983.
3）伊波普猷：南島の黥（はずき）、ドルメン、1、1932.（八）より引用
4）小原一夫：『南嶋入墨考』、筑摩書房、1962.
5）笹森儀助、東 喜望校注：『東洋文庫　南嶋探験、1、琉球漫遊紀』、平凡社
6）名越 護：『南島雑話の世界』、南日本新聞社、2002.
7）礫川全次：『刺青の民俗学』、批評社、1997.
8）山下文武：『奄美の針突　消えた入墨習俗』、まろうど社、2003.
9）吉岡郁夫：『いれずみ（文身）の人類学』、雄山閣、1996.